

あなたが嬉しいとわたくしも嬉しい

「ココロ」が生まれてきました。

また、ふれあいコンサートなどで発表会を行うことは、大勢の人前で、自分たちが練習した成果を見せる、

先生のインニシャルからきたもので、フラットは音楽記号から。「レガート」は「なめらかな」という意味を持ち、それぞれ音楽にちなんだ名前となっています。

2人の先生が、子どもたちのココロを読み取り、一人ひとり出来る事は何かを考えながら、音楽を教えています。回を重ねるうちに子どもたちには、音楽の楽しさや音楽を通じてたグルーブの和、仲間同士通じ合う

休日の藤久保公民館ホールから、ピアノの音と打楽器の音が聞こえてきました。ホールに入ると真剣な表情で、3月10日に行われる「ふれあいコンサート」に向け、猛練習を行っているグループの姿がありました。

音を奏でていたのは「MJフラット」と「レガート」。自閉症や知的障がい、ダウン症を持つ子どもが集まり、楽しみながら音楽療法を行うグループです。MJフラットは、中学3年生から21歳まで、レガートは小学5年生から高校1年生までの子どもたちが参加しています。

「MJ」は音楽療法を行う2人の先生の名前からきたもので、フラットは音楽記号から。「レガート」は「なめらかな」という意味を持ち、それぞれ音楽にちなんだ名前となっています。



体を動かしながら、みんなで息を合わせて、歌や演奏を楽しんでいます。

07 MJフラット・レガート

音楽を通じて繋がるココロ

MJフラット、レガートでは障がいを持つ子どもたちが、音楽を通じて楽しみながらココロをひとつに繋げる活動をしています。

「初めてこのグループに参加したとき、練習部屋に入ることさえできませんでしたが、今では、人前で演奏できるまでに成長してくれて、本当に嬉しかったです。皆さんにとって当たり前のことでも、私たちにとっては、ほんの些細なことでも幸せに感じる事ができます。そういう意味では皆さんより、幸せを感じる回数が多いと思いますし、それを誇りに思っています。」

音楽は、すべてのパートがリズムを合わせ、ココロを通じ合わせて演奏したり、歌を歌ったりするものです。音楽の楽しさを知った子どもたちは、みんなで練習する日を「ココロまち」にしています。

という一つの目標にみんなで取り組むことで、一体感を生み出し、自分に対する自信をつけることを、育成する狙いがあります。

障がいの子を持つ家族は、地域との交流が少ないと感じ、余暇時間の過ごしかたについて不安や悩みを持つています。その不安や悩みを軽減する手段のひとつとして、この活動が大変役に立っています。

また、回数を重ねていけばいくほど、子どもの成長を目の当たりにできることに喜びを感じるそうです。

「初めてこのグループに参加したとき、練習部屋に入ることさえできませんでしたが、今では、人前で演奏できるまでに成長してくれて、本当に嬉しかったです。皆さんにとって当たり前のことでも、私たちにとっては、ほんの些細なことでも幸せに感じる事ができます。そういう意味では皆さんより、幸せを感じる回数が多いと思いますし、それを誇りに思っています。」

音楽は、すべてのパートがリズムを合わせ、ココロを通じ合わせて演奏したり、歌を歌ったりするものです。音楽の楽しさを知った子どもたちは、みんなで練習する日を「ココロまち」にしています。

interview

MJフラット・レガートの先生の声

小川 美奈子さん

MJフラット・レガートの講師として創設時から支援しているほか、音楽療法士として、高齢者向けの講習も行っている。

歌を歌うことや演奏することで周りの人に合わせることができるんです

発達障がいの子供たちは、なかなか周りにペースを合わせることができません。歌を歌うことや演奏することを通じ、リズムをとり、同じ歌を歌うということで、周りのペースに合わせることが出来ます。今、ふれあいコンサート（P18に詳細掲載）に向けて猛練習しています。ぜひ皆さんに、頑張っているこの子達の姿を見てほしいです。



子どもたちは小川先生が大好き。先生も頑張る子どもたちの姿を見ると、ココロが温かくなるそうです。

子どもたちが描いた絵の収益で被災地を支援

東日本大震災で被災した障がい児を支援するため、ギフトでは「障がいを持つ子どもたちの思いを形にして、被災地の障がい児を支援しよう」と、子どもに絵を描いてもらい、即売会を開き、その収益を宮城の施設へ贈りました。たとえ障がいを持っている、誰かの役に立つことができますし、被災地を思う気持ちは皆さんと同じです。



↑太陽が笑っている「Smile」。被災者が早くココロから笑顔になれる日を願っています。

06 ギフト

みんなに笑顔贈るココロ

障がいをもつ子どもたちに、笑顔で楽しい時間を過ごしてほしいから……。温かいココロが集まる「ギフト」。は若者が主体となり、活動をしています。



↑担当ボランティアと手を繋ぎ、笑顔で楽しむこの子は目が見えません。しかし、この日はずっと笑顔。子どもたちからも笑顔ギフトの皆さんに贈ってくれます。

障がいを持った子どもたちとの交流

障がいを持った子どもたちとの交流を行っているボランティア団体「ギフト」。中学生、大学生、銀行員やシステムエンジニアといった20代までの約30人のメンバーが活動しています。

ギフトは2001年に発足し、今年で12年を迎えます。ギフトの由来は「みんなに笑顔贈りたい」から。自閉症や知的障がい、ダウン症などの子どもたちと休日の余暇を利用して、バスで出かけています。その時は親から離れ、一人ひとりに担当のボランティアが付き、一緒に行動します。最初は親から離れることが不安で、涙ぐんでいた子どもも、今では自分から行きたいと言うほど、ギフトのある日を「ココロまち」にしているそうです。



↑バスに乗り、群馬県みなかみ町まで雪遊びをしに行きました。

ボランティアの声

ギフトの日をココロまちにしていると聞くと嬉しい

17歳の時から参加しています。最初は抵抗がありましたが、今では友達感覚で接することができます。彼らの成長が楽しくて、トイレにひとりで行けたということだけでも「成長したんだな」としみじみ感じます。保護者から「ギフトの日は何？ってずっと言ってきたよ」という話を聞くと、嬉しくなります。

小松原 慎介さん

現在、副代表を務める。8年前からこの活動に参加している。子どもたちのお兄ちゃんのような存在。3月に結婚予定。



interview